

絶滅危惧種の渡り鳥コアシサシが、猛暑になると、日陰をつくったり水をつけたりして卵を冷やすことが、東京都市大学(横浜市)などの調査でわかった。温暖化に対応した行動として注目されている。

人工営巣地づくりに取り組むNPO「リトルターン・プロジェクト(LTP)」と同大の小堀洋美教授の研究室との共同研究。東京湾岸の森ヶ崎水再生センター(東京都大田区)の屋上に砂を敷いた人工営巣地で、2010年と11年の5〜8月に抱卵行動を調べた。コアシサシはオーストラリアなどから飛来し、夏場に日本で繁殖

する。砂地に浅いくぼみをつくって産卵するため、卵の孵化は地表の温度の影響を受けやすい。調査では1分ごとに卵の周りの温度を測定し、ビデオで記録した鳥の行動との関連を分析した。



巣の上に立って日陰をつくる親鳥=2011年7月、東京都市大学提供

コアシサシ調査

その結果、通常は卵を抱えて温めるが、周辺の温度が34度を超えると、逆に冷やす行動をとることがわかった。卵の上に立って陰を作る▽水辺で腹を湿らせて抱卵する▽羽ばたいて卵に風を送る――などして卵を冷やしていた。

小堀教授は「一定の温度に達すると温める行動から冷やす行動へ変化する点が興味深い」と話す。人工営巣地で繁殖を進める際の保全策を検討する基礎データになるとみる。

東京湾での人工営巣地づくりは10年前から続き、多い年で千羽以上が飛来する。(古沢範英)

暑い

から

卵を冷やす鳥